

筆内幸子

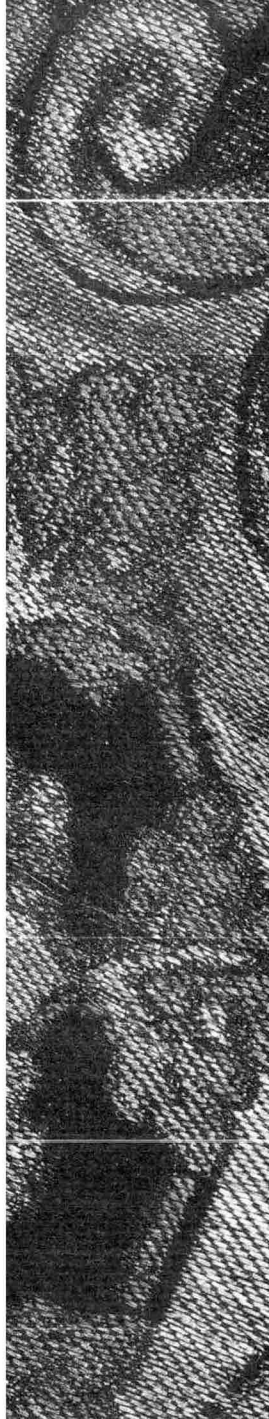
小説 春日局

泰流社

筆内幸子

泰流社

小説 春日局



著者略歴

筆内幸子(ふでうち ゆきこ)

東京女子師範学校卒

日本ペンクラブ会員

日本文芸家協会会員

日本文芸大賞女流文学賞受賞

著書「おたあジュリアの生涯」(泰流社刊),「悲恋の五箇山流利」「百万石を支えた女人たち」「丹那婆」「加賀の千代」「蓮加上人とその五人の妻たち(上・下)」「百万石の幼妻 珠姫さま」「銭屋五兵衛と千賀」「北陸の歴史にキラめく女たち」(いずれも北国出版社刊)

小説 春日局

著者 ■ 筆内幸子

発行者 ■ 西村允孝

発行所 ■ 泰流社

東京都新宿区山吹町三四一

電話 〇三(二三五)二〇三二

振替口座 東京〇一六二七六五

印刷 ■ 三報社印刷株式会社

コード ■ ISBN4-88470-662-5 C0093

●小說 春日局——目次●

未来に賭ける女の夢

7

お乳^{ちのこ}人^と参上

36

お伊勢参りと鷹狩り

82

愛の乳人に智仁勇の守役

115

紫衣事件^{しえ}

155

忠長哀れ

168

世子誕生

198

小説
春日局

未来に賭ける女の夢

早春、このところ未練げに降りつづいていた雨が、けろりとあがつて、淡い青が限りなく広がった。雲のかけら一つない。

「磨きあげた鏡」

と、ふくは顎を思いきり上げた。果てしなく広がった空を見上げ、小高い山の峰々に目をさまよわせると、峰の頂上の辺りはまだ白い衣をかぶっていたが、裾野は一面の若葉にきらめき、まぶしい。

ふくの住む清水城は城とは名ばかりの、丘の上の館だった。

ふくが土佐の海を渡ってここへ帰ってきたのは去年の春、あれからあつという間に一年がとんで、ふくは今年十七歳の春を迎えた。

母のあんと四つの年に美濃を追われ、土佐へ渡ったふくは、故郷のこの清水城をよく夢に見た。夢の中の城は堂々とそびえ立っていて、大きく立派だった。帰って見ると、想い出の幻はしぼんで、粗末な館にしか見えないばかりか、跡にしてきた土佐の城が堂々としていたことが懐かしく

思ひ出された。

「おふくさま、何を見ているの」

ドンと背中をたたかれて、ふくはよろめき、振り返った。またいこのもとが笑顔で立っていた。もとは父・利三の仕えていた、稲葉一鉄の娘の子だった。ふくの母は一鉄の兄・稲葉通則の娘だったので、二人はまたいとこの仲だった。

「何を考えてたの。ずうっと見ていたのよ。そう、小半刻ぐらい」

「大げさね、小半刻だなんて。ほら、あそこ、あそこ見て」

ふくはいきなり揖斐川の土手に目をやった。そこにさっきから寝そべっている若い男女の姿があった。

「お天気は素晴らしいし、あの二人、とても幸せそう。怪しい仲間、きっと。見てご覧、何するか」

清水城の小高い櫓の格子戸の合間から女の目が四つ、見据えているとも知らず、男の体が女の体にむしゃぶりついていて重なった。

「あらっ、いやだっ、けがらわしい」

もとは両手で目を覆った。ふくはかみそりの刃で一線引いたような細長い目をぐいとむいて、まばたきもせず見つめた。口もとには冷たい微笑が張りついてた。

「何でけがらわしいのよ。人間の男と女がすること、してるだけじゃない。したくても出来ない女もいるわ。も、ちゃんは美人だから男に好かれるけど、縁談だって降るほどあるけど、わたし

は疱疹（天然痘）のあばた面、そのうえチビで、デブときちや、もらい手がない」

「おふくさまだって、かわいい顔してるわよ。それに、おふくさまは心がキレイよ。さっぱりしてて、一途で、親身に人のために尽くすし、太っ腹の心美人よ。頼りがいのある女だって、稲葉の正成さまがいつてるそうよ」

「いいの、お世辞いわないで。それはそうと、も、と、ちゃんは蒲生家の重臣・町田さまからぜひつてお話があるんだってね」

「おふくさまって、すごい早耳ね」

「あなたと違って、私は四つの年に父のさらし首を見せつけられた女よ、苦勞してるもの。アンテナを高くして、素早く情報をキャッチしないと逃げ隠れて生きることが出来ないでしょ。それに、この慌ただしい戦国の世の中、うまく生きてはいけないでしょ。先の見通しを立てるのも早耳で情報をつかまえないければね。何しろ、私は信長さまを殺した逆臣・明智光秀の家老の娘、しかも、本能寺攻めの時の総大将・斎藤利三の娘でございます」

もとはすずやかな目を一杯に見開いて、ふくのたくみな弁舌にいちいちうなずいていた。

「偉いのね、おふくさまって、いまに男の人みたいに出世するわよ。大変なご苦勞をしているのに、ちっとも落ちこまない、明るいサバサバした気持でいられるなんて。男でないから大名にはなれないけど、女は何になれるのかしらね、出世するとしたら。もし、あなたが出世したら、わたしをそばにおいてね。わたし、お嫁になんかいいたくない」

「わたしもよ。どうせわたしは男に好かれない女だから。なんとか出世して、男をあごで使って

やりたいな。男はいくさばかりして、殺したり殺されたり、男たちの治めているこの世は地獄よ。わたしの父も、明智の殿さまも、そして、信長さまだってかわいそうなお方なのよ。戦の地獄を這いずりまわって生きてる男どもをあごで使って、平安な楽しい世の中を作り出したい。それにはどうしたらいいのかって、今考えていたの」

「えらいこと考えてるのね。この戦国の世に一寸先は闇の地獄だって母がいつもいってるわ。先のことは考えない方がいいって。この清水城だって、いつ攻め滅ぼされるかわからないから、早くお嫁にいつて子を産んで、一日でも二日でも楽しく暮らす方が得だって。

でも、おふくさまは未来に夢をかけて、生きてるのね、今が地獄だから。でも、きつとおふくさまが考えてる平安な、極楽の世の中がきつとくるわよね。わたしおふくさまのその夢の役に立ちたい。お嫁になんかいきたくない。男なんて大嫌いよ」

「でも、そうはいかないね。も、もちゃんは美人だもの。色白で、ポチャツとしてて、男ならみんなあなたが好きになるわ。蒲生家の重臣・町田さまの息子が一目惚れしたの、無理ないね」

「でも、わたし嫁きたくない。この清水城におふくさまと、いつまでもいたい」

「女同士結婚出来たら、どんなにいいだろうって、わたしだって思ってる。も、ちゃんと離れたくないって」

ふくはもとの肩に手をまわして、男が女を抱くような仕草をした。

「あつ、あれ見て、おふくさま」

もとは抱かれたまま顔を少しかたむけ、谷汲山の峰の頂上を見上げて頓狂な声をあげた。天辺

の辺りに黒雲がむくむく湧き出したと見る間に、雲はぐんぐん広がって辺りが暗くなった。とたん、鋭い光が一閃空間を走った。土手の男女がしっかりと抱き合った。凄まじい音が耳をつんざき、轟音を立てて雨が大地をたたきつけてきた。土手の男女は雨にたたかれ、むくくと起き上がりざま、一散に手をつないで村の方角目がけて駆けていく。

「春雷」

ふくはつぶやき、大地をたたきつけてくる雨足に目を据えた。

なぜ、男は戦をするのか、男は、平安な日がつづくと退屈するのであろうか。この激しい春雷に似た戦がいつ、どこで突然はじけるかしかない。男には戦が必要だというのか。ふくの思いが跡ぎれたとき、はたと雨がやんだ。櫓の軒先から雨だれが未練げに長く尾をひいて、ゆっくりと落ちていく。

「戦をしなかったら、明智の殿さまも父も、あんな無残な死にざまをさらすことはなかったんだ。小さかったから、はつきりとは覚えていないが、粟田口で磔にされた父の顔は胸に焼きついて離れなかった。秀吉って男に、いつかは仕返しをしてやろうと、まだ四つだったふくは齒ぎしりし、地団駄ふんで泣いた。

あんな嫌なことのない、平安な世の中を作りたい、女だって出来ないことはないはず。どうせ貰ってくれる男なんてないんだから、平安な世の中を作ることに、この命をかけよう」

いつまでも雨足を見つめているふくの背中にもたれかかるようにして、もとは揖斐川の早い流れを見つめていた。

ふくの住んだという清水城は現在の岐阜県揖斐郡揖斐川町清水にあった。高さ百メートルほどの丘陵を背にした平城で、揖斐川に沿った部落の中央に位置していた。

戦国時代の初めごろまでは加納江津（悦）右衛門の居城であつて山城だったのを、ふくの父・斉藤利三の主で、美濃三人衆といわれた曾根城主・稲葉一鉄が攻め落とし、新たにこの城の主になった。一鉄は城主になると山城をとりこわして、山下の部落に平城を築いて移り住んだ。

ふくの父・斉藤利三は何度も主を替えた人で、初めは一族の斉藤龍興に仕えていたが、龍興の人柄についていけず、同じ一族である、この清水城の新城主・稲葉一鉄に仕えた。しかし、この主人にもまたあきたらず、妻あんの兄・明智光秀に仕えた。

利三は光秀が単なる武将ではなく、学問文芸にも心をよせ、連歌師・紹巴や細川幽斉などと交遊があること、風月花鳥を愛で、文学を好むことにひかれて腰を落ちつけ、ついに家老職にまで出世した。

天正十年六月、義兄でもあり、主でもある光秀が本能寺に信長を襲った時、利三はその主力の総大将として信長を攻め立て、ついに信長を火焰の中に自刃させた。

信長を攻め殺して天下を取り、得意の絶頂を味わったのも束の間の夢、光秀は十日あまりで羽柴秀吉に攻め立てられて惨敗、小栗栖で土民に襲われて自刃、ふくの父・斉藤利三も惨敗後、近江の国に紛れこんだが、しらみ潰しの掃討作戦にたちまち発見されて、京都六条河原でふくの兄と共に首を刎ねられた。

それでもまだ秀吉の腹はおさまらなかったのか、それとも、これから天下を取ろうと意気盛ん

な秀吉のことである、天下を取った時の用心にと、主殺しの罪の重さを世間に示しておきたかったのか、反乱の張本人・明智光秀と共に、一旦刎ね落とした首をまた胴にすげ直して、京都栗田口で磔刑にした。

ふく、四歳の初夏のことである。

「お父さまの最後を見届けましょう」

気丈な母あんはふくの手をしっかりと握りしめて、栗田口の刑場へ急いだ。

「主殺しの反逆者・明智光秀と、その家老・斉藤利三のはりつけだぞっ」

大勢の人々が口々にののしり騒ぐ声を耳に、ふくは人々の陰に隠れて恐る恐る、しかも、しっかりと見届けた。母に抱き上げられてよく見た父の顔は石に見えた。冷たく固まって、恨みの思いが顔一面に吹き出たのか、ドス黒かったことを、ふくはハッキリと覚えていた。

父に別れを告げるとその足で、ふくは母あんと、明智光秀の家老として預かっていた龜山城には戻らず、伯母の嫁ぎ先である長曾我部元親を頼って土佐へ向かった。淀川から船に乗って土佐へ渡るのだと、あんは四つのふくに言い聞かせた。小さな荷物を背中にくくりつけられたふくは、初めてわらじという物をはいた。たちまち足の指にマメが出来て血がにじみ出したが、ふくは痛む足を引きずってひたすら歩いた。痛いとも、辛いとも、苦しいともふくはいわなかった。母が涙一滴こぼさず、唇を固く結んでうつむいて歩く姿が悲しげに見えたからである。ひたすらに歩くことが、母の悲しみをやわらげることだと、ふくは思い、母の先に立って気丈に歩いた。途中何度か秀吉の警備の侍にとがめられたが、そのたびにあんはその天性の美しさと機智でうまく逃

げ通して船に乗った。

船にも秀吉方の警備の侍が乗り込んできて、「確かにこの船に明智の家老の娘と妻が乗り込んだ」とばかり、船内くまなく探されたが、二人は顔見知りの船頭のはからいで船底にもぐりこみ、荷物の中に入りこんでむしろをかぶり、荷物の一つに化け通した。「積み荷の一つ一つを槍で突いて確かめろ」侍の頭分らしいのがダミ声張り上げ、積み荷の一つ一つを槍で突き出した時、あんは小さく南無阿弥陀仏と唱えていた。あわや一突きという危険な瞬間をくぐり抜けて、二人は無事に土佐の桂浜へ上がった。

ブス、チビ、デブのわたしなんか、嫁にもらってくれる男はいないと、自分できめつけていたふくに、縁談が降ってわいた。しかも、相手は清水城の主・稲葉一鉄の息子重通しげなちの養子、稲葉正成だった。養子とはいっても、正成は重通の娘婿だった。重通の娘が女の子を残して若死した後、正成はどこへも行かず重通の養子のままだった。

反逆者・明智光秀の家老・斉藤利三の妻あんや娘ふくが土佐に逼塞ひっそくしていたのを、郷里の美濃へ呼び戻してくれ、清水城へ居候させてくれたのもこの重通をはじめ稲葉一族であった。というのも、一鉄の息子重通は秀吉がまだ信長の家臣としては下っ端だった時代から秀吉に仕え、度々の合戦で数々の手柄を立てていた。秀吉が信長に従い美濃に攻め入った際にはその地理に詳しい重通が案内役になり、先頭切って大活躍した。その手柄でこの時重通は大名に取り立てられ、稲葉一族の頭領になっていた。頭領の家の養子が他家から入った人で、肝心の血すじの娘が死んだ